

様式第2号(第10条関係)

会議結果のお知らせ

- 1 開催した会議の名称 平成29年度 第2回佐伯市総合教育会議
- 2 開催日時 平成30年2月9日(金) 15時30分から17時20分まで
- 3 開催場所 佐伯市役所 本庁舎6階 第2委員会室
- 4 出席者 市長 田中 利明 教育長 土崎 谷夫
委員 河野 利道 委員 桑門 超
委員 米倉 ゆかり 委員 岩佐 礼子

〔関係者〕

佐伯鶴城高等学校長 志賀 信幸
佐伯豊南高等学校長 渡邊 一朗
日本文理大学附属高等学校長 田中 英明
佐伯教育事務所次長 立川 研一

〔佐伯市教育委員会〕

教育部長 小野 正司 学校教育課長 川野 剛
参事 高野 徹 総括主幹 石井 睦基

〔総合教育会議事務局〕

総合政策部長 菅 隆久 秘書政策課長 金田 隆
総括主幹 御手洗 修

- 5 公開、非公開の別 公開
- 6 傍聴人数 0人

7 議題

- (1) 基礎学力の向上について

8 審議の内容

- (1) 佐伯市学力向上プラン、全国及び大分県学力調査結果の説明
(2) 市内3高等学校長から見た佐伯の義務教育の学力についての意見発表
(3) 各教育委員からの意見発表

9 会議の資料名一覧

平成29年度 第2回総合教育会議事前配布資料

10 問い合わせ先

担当課 佐伯市総合政策部 秘書政策課 政策推進係

電話番号 22-4104 内線585

平成 29 年度 第 2 回佐伯市総合教育会議 議事録

- 1 日時 平成 30 年 2 月 9 日（金） 開会 15 時 30 分 閉会 17 時 20 分
- 2 場所 佐伯市役所 本庁舎 6 階 第 2 委員会室
- 3 出席者
市長 田中 利明
教育長 土崎 谷夫
教育委員 河野 利道
教育委員 桑門 超
教育委員 米倉 ゆかり
教育委員 岩佐 礼子
- 4 関係者
佐伯鶴城高等学校長 志賀 信幸
佐伯豊南高等学校長 渡邊 一朗
日本文理大学附属高等学校長 田中 英明
佐伯教育事務所次長 立川 研一
- 5 教育委員会
教育部長 小野 正司
学校教育課長 川野 剛
学校教育課参事 高野 徹
学校教育課学校指導係総括主幹 石井 睦基
- 6 事務局
総合政策部長 菅 隆久
秘書政策課長 金田 隆
秘書政策課政策推進係総括主幹 御手洗 修
- 7 傍聴人 0 名

8 会議の概要

開 会

秘書政策課長 ただ今から平成 29 年度第 2 回佐伯市総合教育会議を開催いたします。開会に先立ちまして皆様にご案内いたします。この総合教育会議は原則公開とされています。また、会議内容も会議録を作成し、公表するよう努めることとされていますので、後日公表する予定ですので、ご承知おきください。開会にあたりまして、田中市長から挨拶をお願いします。

市長挨拶

市長 本日は第 2 回総合教育会議を招集いたしましたところ、皆様にご出席いただき本当にありがとうございます。去る 7 月 21 日に第 1 回目の会議を開催し、佐伯市の教育改革について議論し、テーマの設定の仕方、また会議の持ち方についても議論をいたしました。その会議以降、事務局を教育総務課から秘書政策課に移管すること、会議開催回数を増やすこと、現地視察を行うことなど、佐伯市の子供にとって、教育改革はどうあるべきかを考えた活動する会議にしたいという意向もあり、本日の会議開催となりました。

本日は、佐伯鶴城高等学校、佐伯豊南高等学校及び日本文理大学附属高等学校の校長先生、並びに佐伯教育事務所の方にも、この会議に出席いただき、現場から見た学力観についても議論を広げていきたいと思えます。

私は、本日午前中に上堅田小学校の授業を視察し、大変良い刺激を受けました。上堅田小学校の麻生校長は、私が県議会議員時代に義務教育の国庫負担金の案件において、私の自宅にまで説明に来られ、地域の教育への必要性を訴えるなどの闘争心をお持ちになった方です。彼にお聞きすると、学校現場では「学力の二極化が起きている」とのことでした。その対応策を、地域の方と議論する中で、週に 1 時間、民間の方を学校に招いて、クラスごとに授業サポートをいただく「プラスタイム」という取り組みをしていることとお伺いしました。教育に熱心な豊後高田市長は、低学力層の子供を少なくすることを目的に「学びの 21 世紀塾」という同様の施策において、民間の方々が行う授業を土曜日に開催し、学力を高めていると聞いています。教員の指導力も身につけてきたと認識していますが、まだまだ低学力層の子供に対するサポートが、行き届いていないと感じており、この上堅田小学校の努力を注視しているところです。学校現場の課題をしっかりと把握し、成功モデルづくりながら、「文教都市佐伯」をつくりあげていきたいと考えています。

一方、地方創生を社会インフラの整備や企業誘致などに考えがちですが、基本は、質の高い、文化芸術、学力をもった市民を作ることであり、このこと無くして、佐伯の元気はないと感じているところです。現場の皆様方の声を課題として挙げながら、解決に向かって努力したいと考えているところです。本日の第2回目の会議が、充実した会議となるよう心から念じて、私の挨拶といたします。

関係者紹介

秘書政策課長 本日の会議には、市内3高等学校の校長先生及び佐伯教育事務所次長様にもご参加いただいています。事務局から紹介させていただきます。
(4人を紹介する。)

協議

秘書政策課長 それでは、次第2の協議に入ります。佐伯市総合教育会議運営要綱第4条に、「会議は市長が召集し会議の議長となる」とされております。ここからは市長が議長となり進行をお願いいたします。

市長 それでは、協議2の「基礎学力の向上について」を議題といたします。
まず、会議資料につきましては事前に配布させていただいておりましたが、若干の補足説明を川野学校教育課長からお願いします。

学校教育課長 学校教育課長の川野と申します。事前配布資料により説明いたします。
(資料の補足説明をする。)

市長 ありがとうございます。川野課長の説明で質問がございましたら発言をお願いします。
(質問なし)

市長 それでは、各高等学校の校長先生から、高校現場から見た佐伯市の義務教育の学力について、現況やご意見をお聞きしたいと思います。
まず、佐伯鶴城高等学校の志賀先生にお願いいたします。

志賀校長 佐伯鶴城高等学校の志賀でございます。よろしく申し上げます。私からは、「高校に入るまでの学力について」、加えて「佐伯鶴城高等学校に赴任して佐伯市全般の教育について考えること」をお話しさせていただきたいと思っております。

最初は高校から見た学力の現状についてです。進学校の立場として、中学校を卒業し、本校が受け入れる際に必要な生徒の学力について、大きく2つのお話を申し上げたいと思います。

ひとつは「現状の大学入試について」です。現状の本校における立場から簡単に申し上げますと、国公立大学を始めとした大学合格が一番目の目標となります。大学入試でいかに高得点を取るかということが中心になります。本日の会議参加にあたり、本校職員に日常指導の中で感じる忌憚のない意見を求めたところ、「大学入試に必要な難しいことは高校に任せて欲しい」「難しいことをやる前の段階が躓いては、積み上げようがない」という意見が寄せられました。国語で例えますと「問題文に何が書かれているのかの意味が掴めていない」などの事例がここ数年で判明してきています。具体的には「文章の論理的構成を把握する力」や「世の中で当たり前と思われる単語についての一般常識」が欠けているようだということが職員間の共通意見でした。次に、数学で例えますと「正確さ」と「スピード」です。「計算能力」です。私は物理が専門ですが、物理で躓く生徒は、概ねの理解ができていながらも関わらず、途中計算を間違えていたりして、理解ができていないと勘違いをしてしまいます。ある程度のトレーニングが必要なのですが、ちゃんとできれば良いだけでは上位で通用しません。これは「言語能力」も同様で、ここ最近の大学入試問題の傾向として、問題文が非常に長くなっています。あとは新しい時代に向けて「情報処理能力」が必要となります。具体的に申しますと、小中学校レベルでオフィスの一部を使うことができるかどうかなどです。現在の本校の教育の中では特に重要ではありませんが、これからの10年間を見据えた大きな教育改革の流れの中では必要となってくると考えます。直接の授業において関係は無いものの、更に欲しい能力としては、「知的好奇心」「チャレンジ精神」「諦めない力」「リーダーシップ」など「土台となる力」です。本校に進学している生徒には、将来この地域のリーダーとなって欲しいと思っています。このような力を早い段階から身につけることが理想であると考えます。

概要は以上ですが、佐伯全体の学力について私が思っていることを少し述べさせていただきます。現在、大分県商工労働部と協働で「大分県の高等学校の卒業生が、その後、どの地域で生活しているか」を可能な範囲でデータ収集してみました。本日お話しする収集データは概要ですので、正確性に若干欠けることをご理解ください。県内出身者かつ高等学校卒業後に就職をした生徒は、約74%が県内に就職しています。佐伯市は約80%となっています。出典は佐伯市役所からの資料です。県内出身者かつ県内の大学に進学した生徒は、約33%が県内に就職しています。このことは県内の

大学に進学したにもかかわらず7割が県外に就職しているということです。県内出身者かつ県外大学に進学した生徒は、約8割が戻ってきません。県外出身者かつ県内大学に進学した生徒は、約13%が県内に就職しています。何を申し上げたいかと言いますと、これを足し算して毎年積み重ねていくと人が居なくなるということです。これは100%にして維持できるだけのことで、私たちは100%を目指すことを将来に向けて考える必要があるということです。

その様な目線で、事前配布資料による佐伯市の学力向上策を拝見しましたが、佐伯市はあるいは大分県はどのような子供を育てようとしているのかが、もっと具体的に見えないと学校現場としてはやはり難しいのではないかという気がします。学力向上策で国や県がアンケート調査を実施していますが、その方向に持っていきたいとの意思があるからだと考えます。しかし、アンケートの内容が、佐伯市の目指す教育の方向に合致しているかの議論がされていないことが危惧されることです。事前配布資料から、佐伯市の生徒の学力が都会の生徒の学力と遜色ないことが読み取れますが、これは佐伯市の教員の方々の努力があるからです。一方、都会では学力の二極化が進んでいて、その原因は経済力にあると思っています。佐伯市の学力の傾向は、間違いなく現在与えられている学力で申しますと非常にいい傾向であると判断できます。しかし、そうやって付いた学力が低学力層についてもピンポイントでなされていて、その結果は恐らく今後も現れると予想します。それは「治安」という形で表れてくると考えます。日本の教育が諸外国と比べてなぜこれだけ維持できているかは、低学力層の生徒にまで、しっかり行き届いた教育を行ってきたことで、治安が乱れていないことです。よって、これまでの教員の地道な努力は日本の財産だと判断できます。佐伯市も同様です。反対にトップ層の生徒は、中学校入学段階で、大分市の中学校に入学するに傾向があります。同様に、高校入学段階で、トップ層が上野丘高校を中心に、大分市の高校に入学する傾向があります。先程紹介したデータと合わせて考えると、トップ層は先程の数字以上に地元に戻らないことが自ずと想像されます。佐伯市自体をトップで支えていく生徒の人口は、先程の数字以上に急激な割合で減少していくことが明らかです。果たして、それでこの佐伯市が将来に向かってやっていけるのかを危惧しています。佐伯鶴城高校の校長の立場として、東京大学、京都大学、医学部に合格するトップ層の地元の生徒は、全て佐伯鶴城高校で育てるという方針を、来年度以降も強く打ち出そうと考えています。その意味で、佐伯市全体を挙げて、是非バックアップをお願いしたい。大分市内の高校に通学した生徒の故郷は佐伯市ではなく大分市となります。大

学卒業後に帰ってくる生徒は大分市止まりとなる確率も高く、果たしてそれで良いのか。その様な意味では、本校の役割は非常に大きな部分があると認識しているところです。佐伯市と協力して良い方向に進めていければと考えています。以上です。

市長 志賀校長先生、ありがとうございました。用意していただいた資料は、非公開の扱いとしますので、どうぞ皆さんに提供をお願いします。続きまして、佐伯豊南高等学校の渡邊先生にお願いいたします。

渡邊校長 佐伯豊南高校に赴任して2年を経過した経験から、この地域の教育についてお話をさせていただきます。本校は、旧豊南高校と旧鶴岡高校が発展的に統合し、現在は、総合学科、農業科、工業科及び福祉科の4学科でクラスが構成されています。私は米水津の出身ですので、この地域の教育の変遷については肌身に感じてきました。したがって、校長として本校は必ず残さなければならないと考え、様々な努力を重ねているところです。

昨年、第1期生が卒業しましたが、本校は就職する生徒が約4割から5割、進学する生徒が約5割から6割と、就職がかなりのウエイトを占める学校です。昨年は約100名の生徒が就職しましたが、佐伯市内に就職した生徒は約60名です。大分県内の他市町村に就職した生徒が27名いますので、大分県内に就職した生徒の割合は約8割強となります。工業科の定期的な就職先として、これまでの様々な企業とのお付き合いの関係もあり、県外就職者もいる状況ですが、それを除けば卒業生はほとんど県内に残っている現状です。進学については、4年制大学から専門学校まで幅広い進学状況ですが、県内進学率は約60%、残り約40%の県外進学をする生徒は、主に看護系、保育系、医療系に進学しており、卒業後は県内に戻ってきているケースが多いのが現状です。本校は佐伯の生徒を受け入れ、育て、進学、就職に繋げ、最後は佐伯に残ってもらう「地域の産業界に人材を供給する学校」とのミッションで学校運営をさせていただいています。

さて、学力の観点ですが、本校が目指す学力は、国語などの教科的な学力も重視しますが、それ以上に、教科外の学力も大変重視しています。その理由として、すぐに就職する生徒、専門職に就く生徒が多いため、その際に必要な力として、志賀校長も仰っていた「チャレンジ精神」「課題発見」「コミュニケーション能力」などの学力をつけてもらう必要があります。加えて、本校は、総合学科と農業、工業、福祉の専門学科があるため、工業科で例えると、土木、機械、電気などの専門分野の専門的学習、実習が、福祉科については、介護福祉士資格取得の厚生労働省認定校としての定め

られたカリキュラムでの学習が必要となります。したがって、本校においての基礎的な学力は中学校5教科となりますが、低学力層の生徒には学び直しをしながら、学習をさせています。躓いている生徒には、個別指導で、授業とは別の課題を提供して学習をさせています。工業教科においては、生徒の理解度を高めるため、教科書どおりに学習を進めるのではなく、専門教科と関わりある分野を先に学習するなどの工夫も行っています。

さらに、体験的学習にも力を入れています。実際に自分で体験をし、そこから物事を考え、まとめ、発表、という流れをルーティーンとしています。総合学科では、自分でサッカー教室の企画を考え、サッカー協会やトリニータとの連携をとり、受講生徒も自身で募集し、実践に繋げた事例もあります。このような学習にも力を入れています。

そこで、中学校の先生方に2点お願いがございます。まず、本校は専門学科で産業界と密接に関連をしている学校です。本校教員も様々な企業を訪問させていただいています。併せて、地域の産業界の方々には本校にどんどんお越しいただき、実際に講師になって講話をしていただいています。その様な繋がりを本校では大切にしているところです。その理由は、私が大分県商工労働部に在籍していた際、企業の代表者から「先生は企業のことは何も知らずに、自分達のテリトリーの中でのみ動いている」との声をよく頂戴することがありました。学校現場は教科の学習をするだけでなく産業界と繋がっており、そういった力を借りて、社会の状況を常に注視しながら、運営しないといけないと感じていましたので、今は、そういった形で産業界と繋がっています。中学校の先生方をお願いしたいのは、その部分です。私は産業教育が大事だと思っていますが、企業との繋がりが、企業をもっと知っていただけると嬉しく感じます。例えば、農学部に進学したい時に、実は推薦枠が存在するのですが、希望する生徒が本校に進学していない現状があり、3、4年前に島根大学に進学させた生徒がいるのみです。産業界と繋がることにより、自分は農業をやりたい、工業をやりたい、そのために就職するのもよい、大学進学するのもよい、その進学の際に、工業科からも推薦で九工大工学部に進学する道筋があるのですが、多くの中学生は普通科からセンター試験を受験することしか知らないため、選択肢が狭くなっています。もっと早い段階で、進路選択をしていただくとありがたい。産業界を知っていただきたいということがひとつ、もうひとつは、早い段階で進路意識を醸成していただきたいことがお願いです。

先日、ベネッセのアンケートを見たときに、小中学校の段階で約4割の生徒が自分の進路を決めているとのデータが出ていました。逆に、約6割

は決め切れていないのだと感じたところです。しかし、現在は、もう少し早い段階でいろいろな情報を提供することで、キャリアデザインを描かせるのも良いのではと感じます。私が専門学科の校長だから思うのかもしれませんが、一考していただければと思っています。以上でございます。

市長 渡邊校長先生、ありがとうございました。次は、日本文理大学附属高校の田中校長先生にお願いいたします。

田中校長 皆様こんにちは。本校は去る1月、学力奨学生、スポーツ奨学生の入試を実施しました。668名の応募があり659名が受験をしています。私学の実状としては、生徒が欲しいということが当たり前なのですが、本校は逆に、良い生徒が来てくれる学校にするため、入試では一定の選考をし、今回の入試においても約200名を不合格といたしました。2月にも一般入試を実施しましたが、528名の応募があり、約100名を不合格といたしました。専願生も不合格としました。本校が非情な学校だという見方もあるかもしれませんが。私は本校の校長に赴任して今年で7年目となりますが、4年前に初めて専願生を不合格とし、中学校から^{ひんしゆく}鬻蹙をかかったことがあります。以前はどの生徒でも受け入れる高校、県立高校を不合格になれば文理大学附属高校との常識的な見方の時代があったことからだと思います。このことがきっかけで、中学校が危機感を抱くようになりました。学習しないと文理大学附属高校に合格できないとなり、その危機感が中学校から小学校にも伝わり危機意識を生みました。やはり佐伯の子供は誰でもかわいい。佐伯の子供は佐伯で育てるとの基本的なスタンスは持ち合わせています。しかし、本校のコース等にマッチングしない部分が、進学指導において、高校側も中学校側もお互いに課題を持ち合わせているものと考えるところです。本校は特進コースを設置しています。私は大分雄城台高校に18年間勤務をし、進学とは何かということ自分なりに持っているところですが、一般的には300点満点で150点を得点しないと国公立大学の受験対象にならないのです。高校入学後、進研模試等において、1年生時に偏差値54以上、2年生3年生時に偏差値52以上にならないと、国公立受験を断念せざるを得ないこととなります。

小中学校の先生方をお願いしたいことは、基礎学力は中学3年生までの学力であることから、その基礎学力が8割習得できていないと将来の就職においても厳しい現状が生じます。中学3年生までの学習内容は易しいのですが、高校入学後は急に教科内容が難しくなることから、この基礎学力が習得されていないと高校での学習に支障が生じます。そういう意味で中

学3年生までの基礎学力は大切だと考えます。入試で、「(-7) - 4」などの引き算の正答ができない低学力層の生徒がいる現状もあります。生徒と面談する中で「先生に相談することなく、理解できないままに進学した」等の声が聞こえたことから、「これまで学習していないというスタンスで勉強するように」と指導しています。「やることで基礎学力がつく」と考えているところです。

米水津中学校では、地区の方が学習塾講師を招へいし、地区生徒に学習の機会を与える取り組みが実施されています。ですから米水津の生徒は学力が高いです。鶴見中学校は、公文の塾に通っています。学校の先生方の果たす役割が、低学力層の生徒に時間を費やすことをしないまま、自己満足となっているのではないかという気がします。生徒を伸ばすには、教員がいかに愛情を注いで育てていくかという部分に係るわけで、佐伯市の教育の根本は、教員の資質を高めていくことだろうと思います。

先程、佐伯鶴城高校の志賀校長が、東京大学、京都大学に進学できる生徒を鶴城に進学させて欲しいと仰ってましたが、東京大学、京都大学に進学できる生徒を教えることのできる先生が鶴城高校にはいないのです。ですから、保護者が生徒を大分市の高校に進学させるのです。これは本校も同様で、教えることのできる先生はいません。居ないから雇用しなければならぬのです。昨日、上野丘高校のベテラン教員が本校に赴任しました。上野丘高校の実状を尋ねたところ、良い先生が居ないので上野丘高校も崩壊するとのことでした。大分県全体が教員の配分を勘案する必要があり、人を育てるのは教員であるので、佐伯市にどれだけの教員を確保し、どういふ教育を提供していくかの信頼を保護者や生徒に示せないと、基礎学力を向上させ、それ以上の子供を育てることはできないと思います。

本校の生徒の実態をみると、非常に学習時間が少ないと感じています。その原因としてスマートフォンやゲームが影響しているように思えます。有用な機器とは思いますが、利用時間がルーズとなっていて、保護者の歯止めが利かなくなっているようです。学校教育におけるルール作りの必要性を感じるどころです。また、現在の生徒は目標が無いように思えます。資格や免許の取得はある程度できますが、将来何になりたいのかが欠如しています。本校は、生徒が専門学校への進学を希望するのであれば、医療・看護しか推薦しません。子供たちが現在どんな時代に生きているのか、目標を生徒に持たせることが強みとなります。本校マルチ学科の生徒が、国税庁、大分県庁、佐伯市役所に就職していますが、生徒に目標を持たせ、教員が土日返上で教えているからです。そうしないと合格はできません。目に見えない生徒と教員の努力が必要であることを、県立高校も含め考え

ていけないといけない問題であると考えます。

私は野球部を甲子園に出場させたいのですが、監督などに甲子園常連校の生徒の状況を尋ねたところ、野球だけできる生徒ではなく、学力を備えた生徒であるとのことでした。つまり、自主性が身に付いた生徒であるからこそ甲子園出場が可能となるのです。ですから、何をやるにおいても学力が大切で、考える力が身につけていないと何もできないと感じます。

小中学校にお願いしたいことは、読書に力を入れることです。本校で指導した生徒において、小中学校時の読書の機会を尋ねたところ、1冊くらいしか読んでいないとの答えが返ってきたことがありました。学力は読書に繋がっています。公文教室は国語を重視しています。良い教材を幾度も繰り返し取り入れ、何冊も読書をする教材づくりとなっています。

佐伯市の企業の話もありましたが、企業が求めていることは3つしかないと思います。ひとつは挨拶です。それから、教育の根本である掃除だと思います。特にトイレ掃除ができていない学校はダメであると考えます。清掃ができる、気配りができることは人間性で大切な要素です。最後に笑顔です。楽しくないことは教育ではありません。この3つが根本であると考え、本校では徹底して実践しています。学校の質を高める意味では、低学力層の生徒に対し、個別に指導することで成果が上がります。本校ではこのような視点で学校運営を行っています。

まとめとして、教員の質の向上、中学校3年生までの基礎学力の確保、地域ぐるみ学校ぐるみでの低学力層生徒に対する個別指導が、学力向上に大切な要素であると考えます。

市長

ありがとうございました。県立2校、私立1校の校長先生から、体験的な、あるいは現状の厳しい分析等も含めた様々なご意見をいただきました。教育委員の皆様から、質疑、ご意見を賜りたいと思います。

教育長

3校長の話を伺って、学校のミッション、どういった学校でありたいか、学校の使命を強く意識され学校運営をされていることがよく理解できました。生徒の選択の自由を制限することはできませんが、何故、生徒が佐伯市を離れるのかを分析する必要があり、また、期待に応えるものを佐伯市につくる必要もあると考えます。先程、佐伯鶴城高校の生徒育成方針をお伺いし力強く感じました。一方、教育長として発言してはいけないのかもしれませんが、新佐伯豊南高校の学校名決定には疑念を抱いているところでもあります。開校にあたり建学の高いミッションが求められるべきであり、志向性のある学校名であるべきであったと感じているところです。私が把

握している佐伯豊南高校は、生徒が実業の世界に近い、高校の出口は大人の世界だと意識しているように感じています。社会で通用する人間性や人間関係力を試す意味で、校外ボランティア活動、校外での体験活動、さらには、自校の生徒だけではなく、他の集団や他の世代の方々との交流を多くの生徒に経験させたいとしていることがよく理解できます。鶴岡小学校のサッカー教室のお話がありました。佐伯小学校の生徒との「花いっぱい運動」の活動もされています。積極的に校外活動をされていることが分かる事例だと思います。学力を補完する人間関係力が実業社会には重要であることを認識したうえでの学校運営であると理解できました。文理大学附属高校の校長先生からは、良い生徒は良い先生が育てるのであって、責任を生徒に転嫁すべきではない、生徒の低学力は先生の指導力に負っているとの自覚が足りない、9ケ年の義務教育期間は基礎的学力を保証する使命を負っているとの言葉をいただきました。そういった中から高校教育をそれぞれの使命において実施することが必要ではないかとのことでした。私が竹田南高校の校長時代、横浜から転校してきた生徒が基礎学力を有していないため、竹田駅前の公文教室を紹介しました。放課後、剣道の部活動の後、午後9時位まで公文のドリルで学習をしていました。その様なことを思うと、できないまま義務教育期間終了後に、多くの生徒が、ほぼ100%の割合で高校に進学している現実が大いに問題であり、ここに学校現場も含めて行政が力を注ぐ必要があるのではと感じました。「やればできる」ことを生徒に気づかせ、実際に支援されていることをお聞きすると、義務教育を統括する責任者（教育長）として、耳の痛いことではありますが、そのことに対峙していかなければならないと実感させられたところでありませう。

市長

ありがとうございました。河野委員お願いします。

河野委員

3人の校長先生方から学力という観点から、各々の学校の役割を踏まえつつ、ご意見をいただきまして大変参考になりました。教育は教育委員会や学校がするものだと先入観から、地域に開かれていない、透明性に欠けるというようなことが続いてきました。その様な中、佐伯市のあるべき教育を根本的に考え直す必要があります、そういった意味で、今日の話は大変有益であったと思います。市長も仰っていますが、佐伯市は人口がどんどん減少し、生徒が少なくなっていくことをどうするか。企業誘致も難しい中、人づくりが重要となり、その役割は教育が担っていると思います。私は、この総合教育会議において、佐伯市全体の教育をどうするか計画を作成

すべきと考えます。そのためには、佐伯市のおかれている現状を踏まえ、また先程、各高等学校の校長先生からお伺いした中身も踏まえ、どういう教育が必要なかを議論し、そのために教育委員会はどうあるべきか、長期計画はどうあるべきか、地域の皆様、市民の皆様、ボランティアの皆様、企業の皆様はどう関わるべきか、多岐にわたりきっちりしたものを作成し、佐伯市全体の総意として作成していく必要があると思います。その計画に沿って地道に実施していく必要があると思っています。佐伯市民が佐伯市民憲章をどれだけ認知しているか、共通理解しているか。作成過程においては、市民が協力して作成しました。市民憲章が佐伯市の子供を育てる目標のひとつとなるよう、今から努力しなければならないと思っています。皆が東京大学に進学するような子供になる必要はないと私はと思っています。教育というのは、一人ひとりの子供が、幸せな人生を送るために受けています。人づくりが地域づくりとなり、子供たちが佐伯市に生まれてよかったと思える環境をつくっていかなければならないと思っています。今日は、市長のご尽力で、このような会議を設定していただきまして大変ありがとうございました。

市長 次に桑門委員をお願いします。

桑門委員 校長先生方、市長の話にとっても刺激を受けました。冒頭、市長が文教都市佐伯ということで、教育を大切に考えていきたいとの発言に感銘を受けましたし、校長先生方のそれぞれのお話に刺激を受けたところですが、田中校長先生から、中学校の地域による取り組みを紹介していただきました。佐伯市全体の資料をいただいていた時には、佐伯市の学力は平均的であると受け止めていましたが、それぞれの学校が、学校の特色を生かしながら、切磋琢磨しながら、学力の向上、教育の充実を目指していることが理解できました。佐伯から離れていく子供が多い中、県外に離れる直前の高校教育の現況をお伺いでき大変有益でありました。私の同級生も佐伯から離れて都市部に進学し、そこで仕事を見つけ留まっています。その流れが変わる要素がないかをよく考えるのですが、やはり、高校時代に良い先生の下で学習できたから今の自分がある、佐伯に恩がある、学生時代に佐伯で遊んだことが楽しかったなどが、後々響いて帰省する要因になるのではと考えるところでは。実際の就職を考える中での進路を示し、学力が高い生徒がいったん都市部に転出しても、反対に都市部の人を連れて帰省する位に佐伯が魅力的な街になればと考えるところでは。

市長 ありがとうございます。米倉委員お願いします。

米倉委員 志賀校長先生から提示していただいた資料について、とても興味があった分野でしたので今日は参考になりました。各学校の特色を伺う中で、私が豊南高校にお伺いしていた際のことですが、産業界の方を多く学校に招へいし、豊南高校や文理大学附属高校の生徒が、各部門を回って、地域にどのような企業があるのかなどを経験する取り組みがなされていました。「実際に企業の話を知ったら、様々な企業を見たくなり、時間が全然足りなかった」との生徒の感想を聞きました。私も佐伯市にどのような企業があるのかを把握していませんが、高校生になって、そこで初めて企業を知り、この企業に行きたいと感じたのではないかと思います。こうした高校生の声を聞くと、この取り組みが、産業と繋がる有意義な時間であると当時感じたことを今日思い出しました。もう一点は、高校を選択するときに、高校の先に企業があるとのお話が印象に残りました。中学校においても高校生を呼んで話を聞く、企業の人を呼んで話を聞くなどの取り組みはされていますが、高校の先にこのような企業がある、高校の先にこのような専門職があるなど、高校の先を思い描くものは、小中学校の時点でどの位できていたのかを考えると、生徒たちも高校に進学してふと思うのではないかと考えます。今日は校長先生に参加していただいたのですが、例えば企業の方に参加していただくなど、たくさんこのような機会を設定し、いろんな視点から教えていただくことで、教育について考えることができるのだと改めて思いました。

市長 ありがとうございます。岩佐委員お願いします。

岩佐委員 私はスイスに5年間留学していました。スイスは小学校高学年から職業コースと進学コースに分かれます。スイス人と結婚した友人が「こんな若い時に進学を決めることは大変だ」と言っていたこともありましたが、日本は大学に進学しても分からないような感じで、楽だなあと思っていたのですが、今日の校長先生方のお話をお聞きしていて、ある意味積極的に大人が小学校高学年位から社会とはどういうものだ、どういう職業がありどういう貢献をしているのかの情報をたくさん与え、英語ではオリエンテーションと言いますが、それは方向づけるという意味なのですが、そういうオリエンテーションというものを小学校高学年位から始めると、子供たちは早目に自分の将来像を描くことができるという気がします。文理大学附属高校の試験選考の話がございましたが、スイスの大学はすごく厳しく、入

学は希望すれば叶うのですが、2年目に進級させない仕組みがあり、医学部などの進学割合は半分位です。翌年、再度進級できなければ、医学部からの転部を勧められます。大学でどれだけ大変な勉強が待っているかなどの状況を把握したうえで、高校の時から大学を目指しますから、ある意味、大学の専門性が仕事に直結しているのがスイスの制度です。ですから、学者、設計士、弁護士などになることを望まない生徒は、職業コースを選択し、銀行家や公務員になったり、ITで働いたりします。大学生の90%は大学院に進学します。本当に専門性を目指すために大学に進学するというシステムを皆が理解していて、そして若い時期に進路が別れていく仕組みです。日本には当てはまりませんが、ある意味そのような視点を持つ時期に来たのではないかと考えます。

私がもうひとつ心配していることは、農業、水産業、林業が衰退していることです。若い方が仕事に就かない。農学部も林業をやっていない。ますます専門性を学ぶ学校がないと後継者は出てきません。ところが、私の大学の研究で、自然に関わっている方の話を聞くと、その方はものすごい知識を有しているのです。体験でしか得られない、教科書にも絶対ない知識です。例えば風を読むとか、海の真ん中に行っておおよその魚の位置を知るとか。物凄い知識を持っている方々を子供に会わせるということが非常に大切で、いろいろな職業があり凄い知識を持っている人が仕事をしている分野は面白いと思ってもらう。我々はそういった努力も必要でないかと思えます。ただ机で教科書を読んで専門知識を入れるのではなく、現場の人の凄く面白い話を聞く、猟師の苦労話を聞く、そういう分野の話をこの会議で聞くのもよいのではないかと思います。今日はありがとうございました。

市長 教育事務所の立川次長、お願いします。

立川次長 校長先生方の義務教育に対する期待あるいは課題、宿題をたくさんいただいたような気がいたしましたので、早速、持ち帰り検討させていただきます。いくつか気付いたことを述べさせていただきます。まず、大分県全体の傾向として、二極化の話題がございましたが、確かに数値にも表れてきています。その対応策を県教委でも検討しているところです。佐伯市だけではなく、全県の先生の共通課題でもあります。指導案の中に「つけるべき力」、この授業の中でつけるべき力を明記するということと、そこまでに達していない生徒にどのような支援、指導をするかを記載するように指導しているところですが、その努力を要する状況の生徒に対する支援を

指導案に書き込んでいる教員の割合がまだ6割です。4割の先生が、まだ力の足りない生徒に対する支援を授業中に意識していない恐れがあります。ここは、来年度力を入れていくべき点ではないかとの協議を行っているところです。県教委が「個に応じた指導の手引」というものを発刊して、全ての先生方に読んでいただくようにしているのですが、小学校教諭においては74%、中学校教諭においては57%しか読んでいない現状がございまして、二極化の解消も含めまして、引き続き指導していく考えです。

佐伯の学力についても補足説明させていただきます。学力というのは、「学ぼうとする力」「学ぶ力」「学んでついた力」と言われますが、点数で測られるのは、主に「学んでついた力」です。それ以外の「学ぼうとする力」「学ぶ力」は、学力調査時の生徒アンケートにおいて現れます。これを見たときに、全国から見た佐伯市の生徒の優れている点は、「近所の人に出会ったときに挨拶をしていますか」という問いに対し、91%の生徒が「しています」と答えています。全国平均は77%です。「家の人に言われなくても進んで勉強をしていますか」という問いに対し、65%の生徒が「しています」と答えています。全国平均は53%です。「道徳が好きですか」という問いに対し、66%の生徒が「好きです」と答え、全国平均を10%以上、上回っています。逆に、課題として挙げられているのは、全国平均から10%程度低い項目として、「朝、自分で起きている」「自分で自分の勉強の計画を立てている」「分からない言葉が出てきたときに辞典を引いて調べる」といった、自分の意思で、自主的に、計画的に行うという部分が若干低い傾向があります。学校においても指導する案件ですが、家庭学習においても連携の必要があると判断していることから、県教委としても家庭、地域、学校の協働を呼び掛けているところです。

次に、教員の資質能力向上の件ですが、大分県でも大変課題意識を抱いているところです。大量退職時代を迎え、20代から30代の若い先生が多くなっていきます。人事課においても「公立学校教員育成指標」というものを作成し、それぞれの世代において付けなければならない力を明文化し、そこに自分が達しているかを自己評価したり、他者評価したりするよう検討を進めているところです。重要な指摘と認識し、引き続き取り組んでまいります。

田中校長先生のありがたいご指摘で、「掃除ができないと駄目である」とのお話がありました。実は佐伯城南中学校が「自問清掃」という取り組みを実施しており、私は、今日城南中学校を訪問しトイレを見てきました。ピカピカでした。比例して、生徒の授業に対する姿勢もどんどん上がっています。来年度、再来年度となるにつれ、城南中学校が発展することを確

信しています。この取り組みは、全市に広まりつつありますので、大変期待しているところです。

最後に、佐伯市教育委員会がいちばん力を入れている取り組みに「ふるさと創生プラン」がございます。この取組の中で、産業教育も含め、小中学校の段階から、社会と繋がる、社会に開かれた教育課程を作り上げていくとの取組がなされていますので、今後、発展の可能性がある取り組みであると感じています。佐伯教育事務所、大分県教育委員会としても協力して参りたいと考えているところです。ちなみにこの「ふるさと創生プラン」は全国的にも注目を浴びており、いろいろな大学教授がよく視察に訪れますので、良い形での発展を期待しているところです。

市長 執行部から意見や感想はありませんか。菅部長ありませんか。

総合政策部長 私は、以前、商工振興課に所属していた関係から、当時の佐伯鶴岡高校の体育館で、地域企業のブースを設置し、生徒に企業紹介をする取り組みを行ったことがあります。そういう意味で、産業教育はとても大切だと思っていまして、現在、佐伯市商工振興課が中心となり、小中学校の生徒に市内企業を訪問していただく取り組みをしています。これをもっと徹底していくと、今日の話の中で出された問題に繋がるのではないかと思ったところです。

市長 小野部長ありませんか。

教育部長 私が故郷に戻ってきた理由は、都会での人間付き合いがあまり得意でなく、一方、地元に貢献したいとの思いもあり帰省しました。現在は、公務員の傍ら、地元地域の中で、神楽を始めとしたいろいろな子供たちへの指導を担っています。私は3月で定年退職を迎えますが、地元の活性化に寄与していきたいと思っています。また、教育委員会に7年在籍し、学校教育課にも3年在籍し勉強させていただきました。教員の方々が、子供たちをどのように育てているかがよく理解できました。教育委員会が子供たちの教育環境をしっかり作り、教員の資質も向上させつつ、人づくりを行っていかねばならないと実感しているところです。

市長 ありがとうございます。大変貴重な時間において、皆様方の思いを語っていただきまして、本日の会議が充実した時間であったと感じています。特に、河野委員から、教育委員会だけの教育ではなく、全市的な、佐伯市

民として、どう人間として生きていくか、生き方を含めた全体計画をとの意見がございました。現在、向こう 10 年間を見据えた佐伯市総合計画を策定中ですが、その計画の中で「人づくり」を特筆させていただいています。幼少期、青年期、老年期の時代区分の中で、市民としてどうあるべきかの計画をしっかりと打ち出して、人が人となりうる街づくりを行って参りたいと思います。地方創生もございますが、楽しく、明るく、この街が好きだと感じられる中身のある街づくりを行えば、人口など、多少の数字は気にしなくてもよいのではと思います。高度経済成長の時代は、誰もを大学に進学させてきましたが、現在は時代が異なり、手堅い、地域人としての在り方、こういうことが教育全体に問われてくるのかと感じています。大切なことは、職業観、使命感を持ち、自分の天職は何かを自覚できる人であろうと考えます。その意味で、私は、文化、芸術、人間の感性を大切にしていきたいと思います。桑門委員におかれましては、幼児教育から芸術まで、幅広く手掛けられ、岩佐委員におかれましては、海外経験をお持ちで、専門性を持っておられる。そういう方々が、知恵を出し合い、どう解決していくかなどの前向きなアクションができれば理想であると考えています。

今後は、企業の方をお呼びし、各界各層の方をお呼びしつつ、総合的に佐伯の教育がどうあるべきか、人としてどうあるべきかを含めて会議を開催して参りたいと考えます。また、総合的な教育観を我々自身も学びながら、イメージだけで学校現場をとらえるのではなく、時には現場の視察も行いながら、具体性を持った解決方法を構築していきたいと思います。

予定を 30 分以上も超過しましたが、本日の会議の開催にあたり、改めて感謝、お礼を申し上げます。今後とも、皆様のお力を十分にお借りして、良い佐伯市の教育、人材づくりに励んでまいりたいと存じます。今日は本当にありがとうございました。

閉 会